

---

# 真祖の吸血鬼と業炎の剣帝～転生したネギま！での俺の戦記～

ぱっつあん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

真祖の吸血鬼と業炎の剣帝〜転生したネギま！での俺の戦記〜

### 【Nコード】

N7176N

### 【作者名】

ぱっつあん

### 【あらすじ】

神の手違いにより殺された俺はお約束通りに転生させられることになった。しかも転生先はネギま！の世界と来た……。はぁ……。あんなバグキャラ共のなかで俺は生き残れるのだろうか……。真祖の吸血鬼の力を持っているが、そこその力しか持っていない主人公は生きていけるのか！？しかし成長度はネギを凌駕する！？……。……かもしれない。この話は主人公がしっかり修行して最強（？）になる物語です。現在、リメイク中です

## Ep0『プロローグ』（前書き）

現在文章とところどころ修正中なので、変なところがありますが、ご了承ください。

## Ep0『プロローグ』

気がつけば俺はどこかも分からない真っ白な空間に立っていた。

あれ？　なんで俺ってばこんなところに居るんだ？

良く分からないから、とりあえずさっきまで何をやっていたかを、思い出すことにしよう。

えっと……確か俺はさっきまで普通のつまらない人生を送ってたはずだ。

なぜ学校に行かねばならんだ、とか学生ならば有りそうな不満を抱えながら、俺は登校してたはず。

で、ノロノロ歩いてたらなんか後ろからトラックが突っ込んできて、それからの記憶がさっぱりない……あれ？　俺死んだ！？

嘘だろ……？　俺はまだやりたいことが……特にないな。ならいいか。

とりあえず開き直った俺は、ここがどこなのかを把握するために、周りを見渡した。

右、異常なし。

左、異常なし。

後、異常なし。

前、白髪のオッサンが土下座している。

だれ？　このオッサン？

何このオッサン？　もしかしてあれか、踏んでくださいって言う仕草か？

「大変もうしわけありませんでした

っ！！」

そんなコトを考えるとオッサンがいきなり叫びやがった。

一体なにがどうしたってんだよ。

理由がわからない俺はとりあえず目の前にいるオッサンに話しかけてみることにした。

「あの、何をそんなに謝ってるんだ？」

「えっと、その……あの、じ、実は……その」

何をそんなに言いづらそうにしているのかは分らんが、なにやら嫌な予感がするな。

「……か良い歳こいてもってんじゃねえよ。」

そしてようやく説明したかと思っただが、オッサンの口から出た言葉はとてもショッキングだった。

「つまりなんだ、ほんととはトラックに潰されて死ぬはずだったのは、他の奴なのに、あんたの手違いで俺が死んだと？」

「……そう言うことじゃ……」

「で、アンタは世界を監視する神様と言うわけだな」

「……そう言うことじゃ……」

……この自称神様のオッサンぶち殺していいかな。  
何が手違いで死んだだ。ふざけんのもほどほどにしやがれ。

「俺はこれからどうなるんだ？」

「とりあえずネギま！の世界に転生してもらおうかの」

「…………は？」

今なんつった？ ネギま！の世界に転生？

ふざけんなよ。あんなバグキャラ満載のтонでも世界に転生だと？  
そんなとこに転生したってすぐに死ぬだけじゃねえか。

「その点は大丈夫じゃ。主にはわしから力を与えるからの」

とりあえず俺の心を読んだことは置いといて、これで死ぬことはなくなる………のか？

「で、どんな能力を俺につけてくれるんだ？」

「うむ、主には真祖の吸血鬼の力を与えよう」

「つーことはエヴァンジェリンと同じで不老不死になるつつうことか。」

まあ、これなら死ぬ心配はなくなったな。

「で、あとはどんな力をくれるんだ」

「えっ？」

えっ？　じゃねえよクソジジイ。

真祖の吸血鬼の力もらっても他になんかないと戦えねえだろうが。あんなとんでも世界にとばされて戦わないつつうことは、絶対にありえんからな。

「ほかの力だよ、ほかの力」

「えっと……うん……それじゃあ……魔力と気をほどほどに与えよう」

ほどほどにか。まあ、原作に介入しなきゃバグキャラどもと戦うわけじゃないし、ある程度自分の身を守ればいいからな。

「じゃあそれでいいからなんか武器をくれ」

なんか厚かましいけど殺されたんだからこれくらいしてもらわなきゃな。

「つーか魔力も氣もほどほどじゃあ、戦えないだろ。使い方もさっぱり分からないしな。」

「武器か……。ならこれをやろう」

そう言っつて自称神様が俺に渡してきたのはなんとも馬鹿でかい両刃の剣だった。

おい、俺、剣なんか使えないんだけど。

「大丈夫じゃ。修行のために原作の200年前にとばすからの」「は？」

いきなり二百年前に飛ばすとか言っってきたけど、まさかそこで鍛えろっつてじゃねえだろうな？

ふざけんなよ、テメエ勝手に俺を殺したんだからチートパワー寄越せよ。

「では行くかの」

「おい、ちよつ、待て!!」

と、俺が言っつてるんだが俺の下に穴が出てきた。

「行っってくるのじゃ!!」

「人の話をきけ                      っ!!」

俺の叫びも虚しく俺はこの穴に落ちていつてしまった。

拝啓 お母様

今更ですが先を旅立つことをお許してください。

息子の龍崎桜牙より。





## EpO『プロローグ』（後書き）

感想待ってます！

## Ep1 『炎、転生する』（前書き）

この度、この小説をリメイクすることにしました。

さらに話の大筋も変更することになりました。

改訂版の第一話となります。

では、どうぞ！！

## Ep1『炎、転生する』

目に入る太陽の光、その独特の温かさをその身に受けた俺は目を覚ました。

体を起こして周りを見渡すと、そこは断崖絶壁、樹に囲まれた森の中に俺は寝ていた。

あと少しでも落ちるところがずれていたら、という恐怖を覚えながら、俺は起き上がる。

拳を開いたり閉じたりして、体の調子確かめたところ、転生させてもらう前と変わりなく動かすことが出来た。

……いや。むしろ体が軽くなって、前よりも動きやすくなったかもしれない。

（体が『ハイデライト・ウォーカー真祖の吸血鬼』になった影響か……？）

原作じゃあ、ハイデライト・ウォーカー真祖の吸血鬼と人間の差を説明してなかったから、実際はよく分からないんだけど……。

まあ、見た目が少女のエヴァンジェリンがあそこまで動けるんだから、いくらか肉体の補正が成されてるんだと思うんだけどな。

ハイデライト・ウォーカーしかも真祖の吸血鬼は不老不死、つまりは肉体が成長しないってことは、やっぱりそうなんだろっなあ。

そんなことを思いながら、俺は周りを見渡す。  
すると俺はある物を発見した。

俺の身の丈ほどもある両刃の大剣。見るからに『炎』を冠するよ  
うな姿に、俺は思わず息を呑む。

焼きつくされるといつか、呑み込まれるような感覚に、俺は不安  
を覚える。

ハイデライト・ウォーカー体が真祖の吸血鬼になった影響だからだろうか？ この大剣の強

さが何となくだけど分かる。

（こんなスゲー剣貰ったって、今の俺に使えるわけねーじゃん）

肉体は最強でも、それを使ってる俺自身は最弱なんだから、宝の持ち腐れじゃなか。

余りの大剣の強さに内心で呆れながら、俺は柄に手を伸ばした。だがその瞬間。大剣から炎が発せられ、まるで俺に触られるのを拒むかのように反撃してきた。

ギリギリで手を引っ込めて横に転がって逃げたからいいけど、そうしなかったら俺は確実に焼かれていた。

放たれた炎は後ろにあった岩に直撃し、ドロドロに溶かしていたのを見ると、かなりの熱量だということが容易に理解できた。

（あ、危ねー……。危うく焼死するとこだったじゃねえか……）

せつかく転生したつてのに、こんな下らねえことで死んじまったら洒落にならねえつつうの。

しかも不老不死で死ねないからあの炎で焼かれてる間、俺は気絶するしか痛みを遮断できないってことだ。

あの神様、なんつー代物を俺に寄越してんだよ。確かに武器を寄越せって言ったのは俺だけどさ。

（ん？　なんだ、アレ……）

大剣の近くには一つのケースが置かれていた。

多分、あの大剣の近くに置いてあるってことは、神様が用意してくれたモノだってことなんだろう。

俺は大剣に触れないようにしながら、そのケースを手にとり、中身を確認してみる。

中には一通の手紙と、一対のグローブが入っていた。  
俺はケースの中から手紙だけを取り出し、中身を読む。

『お主がこの手紙を読んでいる頃、僕は亡き者となって……はいないから安心しておけ。』

さて、まずお主がいる場所はどの地図にも乗っていない魔獣の秘境じゃ。

そこにはかなりの数の魔獣がおり、修業にはもってこいの場所じゃ。

お主がある程度力をつけ、そこにある大剣「レーヴァテイン」の炎を使いこなせるようにならねば、周りに張ってある結界が破壊できぬから死ぬ気で修業するのじゃぞ?』

ツツコミどころがたくさんあるんだが、とりあえず言わせてもらおう。

独学で鍛えろって無理がありすぎるんじゃないのか?

どんなに強い奴だって教えてくれる奴がいるから強くなるわけで、一人で強くなれる奴なんてそれこそ才能がある奴だから出来ることだろうが。

ついでにレーヴァテインだっけ? それを使いこなせるまでこの森から出れないって……。

しかも魔獣の森だと?

俺はアレを使うようになるまで何回死にそうにならないといけないんだろうか……。

『次はグローブについてじゃ。』

そのグローブは「レクスグローブ」といい、「レーヴァテイン」の炎をつけている間のみ、拳にだけ操れるようになる代物じゃ。

しかもそれをつけている場合、「レーヴァテイン」の炎に精神を汚染され、凶暴的になるから気を付けるのじゃぞ?

そうせねばすぐに気絶してしまうからのう。

今のお主だと精々五分が関の山じやろうが、鍛えれば制限なしで扱えるようになるじやろう。

では、頑張るのじゃ。それではな』

神様の手紙を読み終えた俺は、ケースと一緒に入っていた『レクスグローブ』とやらを手にしてみる。

甲の部分には『L』と刻まれている。

甲に書かれているのはレクスグローブの『L』なのか。

しかもこのグローブ、レーヴァテインの炎を操れるようになるのか。

そんなことを思いながら、レクスグローブを手につける。

すると、装着したレクスグローブからかなりの量の炎が放出され、俺の意識が徐々に凶暴的になっていくのが分かった。

「オオオオオオオツ!!」

レクスグローブから放出された炎が拳に集束していき、その炎が集束した拳で近くにあった大木を殴り付けていた。

するとどうだろう。あれだけの太さの大木の殴られたところが一瞬にして焼失していた。

しかも迷惑なことに、このレクスグローブを装着してから体が勝手に動いて、自分の意思で止められないじゃねえか。

そして暴れだすこと約四分後、俺の意識は強制的にブラックアウトしていった。

そんな中、俺は思った。

こんなんでは生き残れるのだろうか、ってな。



## Ep1『炎、転生する』（後書き）

今回リメイクしたいと思ったのは、こちらのIDでの最初の作品を完結させたいと思ったからです。

投稿はあくまでも「狙撃手」がメインなので、更新は遅くなると思いますがよろしくお願いします！！

感想待ってます！！



**Ep2『炎、決意する』（前書き）**

早くもリメイク版二話投稿です。  
では、どうぞ！！

## Ep2『炎、決意する』

レクスグローブを使って気絶してから約数時間後、目を覚ました俺は重大なことに気付いてしまった。

まず、『ハイデライト・ウォーカー真祖の吸血鬼』なので死ぬことは絶対に有り得ないが、腹が減るということには変わりない。

いざ飯を食おうといっても、食材も調理するものも全くなく、さらには周りには食べそうな木の実もキノコもあるわけでもない。

この森をくまなく散策すればどこかに食べそうなモノがあるだろうが、その場合には更なる問題が浮き上がってくる。

（魔獣と出会したら……どうなるんですか？）

そう。魔獣と出会したらどうなるんだ、ということだ。

神様の言ってることが本当なのだとしたら、この森には魔獣がうじゃうじゃいることになる。

木の実やキノコを探してる間に見つからない、なんていう保証はないだろう。

見つかってしまえば最悪の場合、いきなり魔獣と戦う羽目になる……冗談じゃない。確かに生き残るために強くなりたいて思っ

たさ。

だけど、なんでこんな一方的にこんなことをさせられないといけないんだよ。

勝手に殺されて、不老不死の力と大層な大剣貰ってはいいが、戦いなんて知らないド素人がこんな場所に放り込まれて生き残れるはずないじゃんか……。

「くそつ、アンタ神様は……そこまで俺が嫌いか……？」

俺は知らず知らずの内に握りしめていた拳を、近くにあった木に打ち付けていた。

これが夢であってほしいと思ったけど、拳を駆け抜ける痛みはまさに本物の痛みだ。

それに、怪我をしたのにその傷がすぐに再生していく。

そう言えば俺、人間やめたんだっけ。

改めて考えてみると、我ながらなんてバカなことをしたんだと思う。

別にチートな力を貰わなくても、『魔法先生ネギま！』の世界に転生することになったとしても、戦わない普通の日常を過ごせたんじゃないかと思う。

でもさ、仕方ないことだったんだ。

殺されたことには確かに抑えきれない怒りが内心であったことは確かだ。

だけど、それ以上に憧れたんだ。

マンガの世界の住人と触れあうこと。そして、主人公ヒロイになってみたいってことに。

誰しも一回くらいは、主人公ヒロイになってみたいってことを思うときがあるだろう。

それは、俺も例外じゃなかったってことだ。

（俺……本当にバカだ）

主人公ヒロイになれるチャンスに飛び付いて、チャンスをもノにしたはいいけど、戦いを前にしたら腰が抜けてる。

しっかり考えたら分かったはずだ。

自分が主人公ヒロイなんかになれるはずがなかったってことくらい。

殴り付けた木を背凭れにするように、俺は尻餅をつく。

空腹感なんてどうでもいい。今はただ、この虚無感をどうにかし

たい。

俺は、そんなことを思いながら目を閉じた。

ゴ  
ガ  
ア  
ア  
ア  
ア  
ア  
ア  
ア  
ア  
ア  
ア  
ア  
ツ  
ツ  
ツ  
!  
!  
!  
!  
!  
!  
!

だが、すぐに目を開けることとなった。

今まで聞いたことがないような、余りにも人間からかけ離れ、どちらかと言えば獣の叫び声に聞こえるような耳障りな声。

発信源は上。目を開けて咄嗟に捉えたものは、俺を今にも補食せんとする鷹竜の姿だった。

食べながらその場から逃げ出していた。

その時にレクスグローブとレーヴァティンを忘れなかっただけ奇跡に思える。

恐怖で一瞬だけ硬直した俺を動かしているのは、『死にたくない』という人間だった頃の本能だけだ。

戦えば勝てる？  
論外だ。

レクスグローブを使えば？ 勝てる保証はどこにもない。

レーヴァテインは？　そもそも今の俺には使えない。

そうだ、俺には『逃げる』という選択肢しかないんだ。

こんな殺し殺される世界に身を投じた以上、弱いヤツから死んでいく。

俺みたいな弱者から。

「うわっ！？」

とてもじゃないが今の俺じゃ逃げ切れない。

鷹竜の放ってきた鎌鼬プレスが、近くの木にあたつて粉々に粉砕

しているのが見えた。

その余波で吹き飛ばされそうになるが、本能的にそれはダメだと悟り、何とか踏み止まる。

逃げる。いったいどれだけの間逃げ続けなければならぬのかは分からない。

だけど、死にたくない以上は逃げるしかないんだ。

不意に世界が回り始めた。いや、元々回ってるけどそうじゃない。視界で捉えられないくらい速く回ってるんだ。

（違う……。俺が回ってる……！？）

自分でもこんな冷静に考えられたことに驚いてる。世界が速く回らない以上、こうとしか考えられない。

そして何故自分が回っているかを考える前に、今まで経験したことの無い激痛が俺の体を襲った。

最早叫び声を挙げることもすらも出来ない。

いったい、いつやられたのかは分からない。けど、確かに俺は鷹竜の鎌鼬プレスに巻き込まれたんだ。

目線の先には俺の左腕が転がっている。さっきので千切られたに違いない。

余りの痛みに痛覚が麻痺してしまったのか、さっきの激痛はもう感じない。

血が抜けて大分冷静になったのか、それとも開き直ったのかは定かじゃない。

しかしそれでも。まだ冷静に生き残るために逃げる事が出来る。

（ここで使えなくて、いつ使っただー！！）

片方のレクスグローブを填めて、右手にレーヴァティンの炎を灯す。

一瞬でいい、一瞬だけでいいんだ。

この炎で、鷹竜の意識を俺以外の標的から外すことが出来さえすればいいんだ。

妙に冷静だななどと自己分析しながら、右手に宿った炎を鷹竜の真上に向かって、『投げるイメージ』で放つ。

鷹竜には人間並みの知性がなかったのか、動く対象を無意識に目で追っていた。

これだけでいい。あとはなるようになる。

俺は近くの崖から身を投げる。もちろん、下に川があることは確認済みだ。

そこで、俺は意識を失った。

「ん……」

頬に何かが当たり、俺は目を覚ました。

既に夜空は真っ暗で、俺が気絶する前は昼だったことを考えると、少なくとも五時間以上は気絶していたことになる。

落ちた先が川で、水が緩衝材代わりになったから何とか死なずに済んでいる。

……まあ、不老不死だから死ねないんだけどな。

なんで沖に打ち上げられていたかは分からないけど、起きたら魔獣の腹の中だったなんてことにならなくて良かった。

さっきの鷹竜の鎌鼬プレスに切り飛ばされた左腕も生えてきてるし、何の違和感もない。

唯一、こっちに来るときに来たままだった制服の左肩からがなくなってるけど、それだけで済んで良かった。

(……少し動くだけで一々こうなってたんじゃ、命がいくつあって

も足りない)

しかも強くなってレーヴァテインを使いこなせるようになるまで、この森から出れないって手紙に書いてあったしな。

嘘かもしれないが、多分本当のことなんだろう。

結局。俺はもう強くなるしか生き延びる方法はないし、この森から出る術もない。

神様とやらの間違いで勝手に殺されて、その拳げ句に強くなるまで死にそうな毎日が続く。

恨んでも恨みきれねえ。恨んで強くなれるんだったら俺はいくらでも恨んでやる。

だけど、恨んだって強くなれるわけじゃねえんだ。

(強くなつてやる……。強くなつて、絶対生き延びる!!)

俺は改めて決意する。

生半可なことじゃダメだ。やるなら本気で、死ぬ気で特訓して強くなるしかないんだ。

だけど、一つだけ気になることがある。

(いったい誰が、俺を川から助けてくれたんだ?)

川にほとんど流れがないってことは、勝手に沖に打ち上げられるなんてことはない。

少なくとも誰かが俺を助けてくれたことになる。

……この森には、俺以外にも誰かがいるのか?

生温い風が、俺の頬を撫でた。





## Ep2『炎、決意する』（後書き）

無意味なフラグを立ててしまった……。

これで早くも新しいオリキャラ登場フラグが立ちましたねww  
次回から修業に入ります！！

まあ、修業といっても最初ですから地味になりますがww  
では、感想待ってます！！

### Ep3 『炎、修業する』（前書き）

リメイク版第三話！！

狙撃手の方のコーボ編の執筆が長すぎてこっちがかなり短い……。

まあ、そのうち長くなるでしょうww

では、どうぞ！！

### Ep3『炎、修業する』

あれから夜が明け、近くにあった木の実やキノコを焼いて食った朝食を済ませた俺は、さっそく特訓を始めることにした。

とはいえ、実際に何をすればいいか分からなかった俺は、寝る間を惜しんで（魔獣が来るのが怖くて寝れなかったのもあるが……）今までのことを思い返していた。

まず、俺はこの世界に来てから『レクスグローブ』と『レーヴァテイン』を手に入れた。

レクスグローブはレーヴァテインの炎を一時的に操れるようになる代物で、使えばたったの五分で気絶してしまうという欠陥がある。しかも使っている間は『炎』の象徴というべきか、燃え盛るかの如く性格が狂暴的になるおまけ付きだ。

その五分が過ぎた後は筋肉痛で体がメチャクチャ痛いのを記しておこう。

筋肉痛になるということは、レクスグローブを使ったときの状態飯に『狂化』と呼ぶ　に俺の体力がついていけてないってことだ。

つまり俺が今からやることは、技を使えるようにすることでも、炎を扱えるようにすることでもない。

「レクスグローブの『狂化』に体力を対応させること……」

そうしなければレクスグローブを使ったときにたった五分で気絶して、戦うどころじゃなくなるからだ。

炎を扱えるようにするのは、レクスグローブの『狂化』に耐えきれようになつてからの話だ。

最初にやることが決まった以上、早速行動に移すしかない。

物事に近道なんてのはないが、腕立てや走り込みで体力をつけても、常に死ぬ気で出来ていない以上、どこかで甘さが出てくる。それじゃ駄目なんだ。それじゃ……強くはなれない。

どうせ死なない肉体なら、本当だったら死ぬくらいの特訓をしないと意味がない。

正直に言えば怖いさ。それでも、毎日をビクビクしながら生きていくのなんか真っ平御免だ。

その考えの果てに行き着いたのがここだ。

「崖登り……。補助もなしで登るのなんか、余程のバカか命知らずくらいだろうな……」

上を見上げれば、およそ一〇〇メートルぐらいの先に、ようやく崖の終わりが見える。

ここを息切れしないで登りきるだけの体力がつけば、まずレクスグローブの『狂化』に振り回されるなんてことはなくなるはずだ。確証なんてものはないんだけどな。

事前に持ってきていたレクスグローブを見つめる。

レクスグローブを装着して登れば、身体能力を向上させたまま無理な運動をやらせることが出来るため、体力の向上は早く出来るはずだ。

だが、それじゃあ五分が限界だ。五分が過ぎたら気絶して登った高さから真っ逆さまだ。

逆にレクスグローブをつけなかったら今ある体力のみで、登るためかなりの時間がかかる。

じっくりとしつかりとした体力付けが出来る。

「……どっちを選ぶかなんて、決まってんじゃない」

レクスグローブを使えるようになるために体力をつけるんだから、

レクスグロープをつけたままやった方がいいに決まってる。

二回の深呼吸の後、俺はレクスグロープを両手に装着する。

レーヴァティンの炎がレクスグロープに宿り、性格が狂暴的になっていくのが分かる。

何故レーヴァティンの炎を扱えるようにする、このレクスグロープを使うとこのように狂暴的になるのか……。

詳しいことは分からないが、おそらくはレーヴァティンの炎を扱えていなく、レクスグロープに籠められた少量の炎が体内で暴れているためなんだろう。

「ウオオオオオオツツツ!!!!!!」

普段の俺なら言わなそうな雄叫びをあげながら、俺は崖を登り上がっていく。

崖を登るのも『狂化』しているとはいえかなり辛い。

身体能力が上がっているとはいえ、あくまでも現在の俺の身体能力より上がっているだけだ。

そんなに目にも止まらない速さで登ることなんて出来ない。

一点に留まらず、すぐに他の点に移動しなくては落下してしまう。

それを『狂化』していると本能的に悟る『直感』があるために、体が勝手に動いている。

どちらかといえば、レーヴァティンの炎に動かされているといった方が正しいかもしれない。

何てことを考えてるうちに五分が経過したんだろう。

レクスグロープの炎が消えて、意識が急激に薄れていくのが分かった。

『狂化』して登った高さはおよそ三十メートルほど。

だが、このまま頭から落下したら間違はなく肉塊だ。<sup>ミンチ</sup>再生するからって、そんな理由で簡単に落下したくない。

(やべっ……本当に……死ぬ……)

薄れていく意識の中で、俺は何とかそれを阻止しようと何かを掴もうとする。

しかし、周りには掴めそうなものは何もない。

ジェットコースターを降りるときとはまた違う浮遊感を感じながら、俺は必死にもがく。

仕方ねえな、これで貸し二だぜ？

完全に意識がなくなりそうになる直前、そんな女性特有の声が聞こえてきて、温かい何かに包まれる感覚を感じ、完全に意識を失った。

……誰の声だったんだ、あれは。

俺が目覚まして最初に思ったことはそれだった。

この森には俺の他にも人間がいるかもしれないというのは分かっていたが、わざわざ助けてくれるとは思わない。

体に疲れがないところを見ると落下はしてなかったようで、やっぱり助けてもらったと思えない。

でも、周りには誰の人影もない。

「……………」

しかもこれは何なんだ？

目の前には明らかに人の手で作られた焼き魚が用意されており、いかにも怪しい感じがする。

それでも空腹には逆らえずに、俺は焼き魚を手にとり、口に運ぶ。

「……美味い」

普通に美味かった。

あれ？ 別に罨が仕掛けられてる様子もないし、普通の焼き魚なんだけど……。

いったいどの誰が、俺みたいな馬の骨に食料を用意してくれたんだ？

よく分からないんだが、この焼き魚を用意してくれた人に感謝しよう。もちろん神様なんぞには絶対エに感謝しねえ。

用意されていた焼き魚を食し、立ち上がる。

ふと、視線を傾けるとあるモノが目に入った。

「なんでコレがここにあるんだ……？」

何故か神様に貰って大剣、レーヴァテインが木に立て掛けてあった。

おかしいな……。レーヴァテインはレクスグローブをつけてないと掴めないから、一番最初に落ちた場所に置きっぱなしのはずだったんだが……。

まさか勝手に動き出したのか？ 何てことがあるはずがないか。

じゃあこの焼き魚を用意してくれたヤツが持ってきてくれたとでもいうのか？

「有り得ない……。もしそうだとしたら、レーヴァテインに認められたってことか……？」

レーヴァテインが使えるんだったら、その人に是非とも特訓の師匠をしてもらいたい。

だけどその人はどこにもいないし、今は探している時間すらもな

い。

探してる暇があるんだったら、レクスグロープを填めてもう一回登るか。

次は助かるなんて保証はないが、それでもやらないといけないんだ。

レクスグロープを再び両手に装着し、崖を登ることにした。

「はア……あいつも懲りねエな」

オレは木を背凭れの代わりにしながら、レクスグロープをつけて崖を登るあいつを見守る。

あんな使い方じゃ、すぐに炎がガス欠起こすに決まってるじゃん。レクスグロープを使うのに自分の体力を対応させることに気付いたのは良かったが、あんな修業の仕方じゃいつになってもそいつは使えないぜ？

むしろ死にそうになりすぎて、死ぬ気で修業に取り組めなくなる。はあ……。今までで二回も助けたのに全然気づいてねえし、こりや結構早めにオレが出てく必要があるな。

「まア、もう少し自力で頑張りな。もう少ししたら助けてやるからよオ」

オレは今にも崖から落ちそうになっているヤツを見て呟き、もう一度ヤツを抱き抱えた。

やれやれ……。本当に懲りねエヤツだぜ。





### Ep3『炎、修業する』（後書き）

早くも予定になかったオリキャラの登場フラグがww

次回の更新は出来るだけ早くしたいと思います。

それと、出すオリキャラは前と違うかもしれません。

あのキャラが出て、あのキャラが出ないというのがありますがご了承ください。

また、せめて旧版のこのオリキャラだけは出してくださいというのがあったら言ってください。

では、感想待ってます！！

## Ep4 『炎、師事する』（前書き）

旧式にいなかった師匠オリキャラ登場！！  
では、どうぞー！！

## Ep4『炎、師事する』

「はぁ……はぁ……。くそ、まだ足りないのか……」

俺が修業を始めてから、早くも一週間が経過しようとしていた。

一週間っていつても時計があるわけじゃないから正確な時間は分からないから、日が落ちて日が昇ったら一日が経過したことになっている。

この一週間、俺はレクスグローブを装着して崖を登り、意識を失わないようにすることと、基本的な体力をつけることだけに集中していた。

馴れてきたからか、体力がついてきたからかは分からないが、レクスグローブに宿る炎が消えても気絶しなくなった。

気絶しなくなったのはいいとして、炎が消えたら登った位置から真っ逆さまというかなり危険な状況に陥ってしまった。

昇りきるにしても上への距離はまだあるし、降りるにしても時間がかかる。たった今降りてきたところだけど、案の定かなりの時間がかかってしまった。

（やっぱり、体力も何も足りない……。畜生、こんなじゃこっから出るのも無理だぞ……）

ここから出るには『レーヴァテイン』の炎を扱えるようになって、この魔獣の森に張られてる結界を破らないといけない。

『レーヴァテイン』は愚かレクスグローブすらも扱えるようになっていない以上、出れるのに何十年かかるのやら……。

この一週間の間はどうかは分からないが、魔獣と出くわさなかったけど、これから先も出逢わない保証はない。

せめてレクスグローブを扱えるようになり、魔獣と戦えるようにならないと絶対に生き残れない。

「どうすればいいんだ……」

このまま崖登りなんかやったとしても、体力がつく前に魔獣に見つかって食われちゃう。

体力の他にもレーヴァティンを扱うんだったら、多分戦闘面に関しても修業をしないとイケないのかもしれない。

レクスグローブに宿る少量の炎すらも未だに扱えない。そうだったのに、レーヴァティン本体の炎を扱えるようになってなれるはずがないじゃないか。

なんで……なんでこんな目に遇わないとイケないんだ。

神に勝手に殺されて、勝手に転生させられることになって、勝手に不老不死にされて、勝手にこんな危ない場所に送られた……。

俺が望んだ武器でさえ強くなければ扱えない代物だし、何もかもが神に勝手に決められたことだ。

どうして俺がこんな目に遇わないとイケない。どうして俺はこんな場所に送られた。どうして俺を　殺したんだよ……。

「もう嫌だ……」

俺は両手を投げ出してその場に横たわった。

なんで前世は普通の学生で喧嘩をすることさえなかったのに、いきなりこんな非常識なモノと戦わないとイケないんだ。

戦いなんてしたくない。どうにでもなっちまえばいいんだ。

レクスグローブを放り出して、俺は空を見上げる。

あーあ。なんでこの空だけは転生後も転生前も同じなのに、俺だけはこんなにも変わっちまったんだ。

主人公なんてもうどうでもいいし、俺は生きればそれでいい。

どうせ食われたって生きれるし、再生し続ける。

痛みを受け続けるのは、不老不死になったときに決まったことなんだ。

修業して強くなるか、何もしないでここにずっといるか。どちらにしろ、俺の選択肢はどちらの地獄を選ぶかなんだ。

もう、俺は嫌なんだ。修業するのも、戦うのも。

「甘ったれてンじゃねエぞ、そんなことでいいと思ってるのか？」

「……誰だよ、アンタ」

今この場に誰かがいると分かったとしても、別に驚きやしない。

誰がいたって、俺には関係ないんだ。

話し掛けてきたのは女性だった。オレンジ色の髪を腰の辺りまで伸ばし、右の頬には三角形の模様が描かれていた。

どこことなく感じたことのある荒々しいというか、温かいというか、よく分からないけど、初めて会ったのにそんな気がしない。

だけど、そんなことはもうどうでもいいんだ。

俺はもう、何もかもがどうでもいいから。

「腑抜けなお前に名乗る名前などない」

「あつそ……。どうか行ってくれよ。俺はもう、何もしたくないんだ」

「だから甘ったれてんなって言ってるんだ」

女性は体を放り出している俺の胸ぐらをつかんで無理矢理起き上がらせると、俺の目を直視しながら言ってきた。

何だっつてんだ、こいつは。甘ったれるも何も俺は、何もしたくないんだよ。戦うのも、修業するのも。

だいたい、俺が強くなる必要なんてどこにあるって言うんだ。

くそっ、なんでこんな会ったばかりの女に甘ったれなんて言われ

ないといけないんだ。

平々凡々な世界から、こんな非常識な世界に連れてこられて甘ったれになるのも仕方ねえだろうが。

俺は胸ぐらを掴んでくる女性の手を掴み、叫ぶ。

「アンタに……アンタに何が分かるってんだ！！ 戦いなんて知らなかった俺が無理矢理ここに連れてこられて、死にそうな目に遇ってるんだ！！ 見ず知らずのアンタに、とやかく言われる筋合いはねえんだ！！」

「だから甘ったれるなど言っているんだ！！」

俺の叫びよりさらに大きな声で女が叫び返してきた。

空気が振動して、森が震えるのが素人の俺でも分かった。

女は俺が掴んだ手を振り払い、顔同士がくっつきそうな程に近付かせながら言ってきた。

「無理矢理連れてこられた？ ふざけるなよ、小僧。お前は自分から望んでここに来たんだだろうが」

「何を……言って……」

「断ることなら出来ただろ。行き先も、与えられるものも分かっている、お前はここを選んだ。分かるか？ ここに来たのはお前の意思だ。それを勝手だと？ 無理矢理だと？ 甘ったれるな！！」

……言われてみれば確かにそうだった。

殺されたのも、不老不死にされたのも間違いなく神の勝手だった。転生してもらうとも言われた。

だけど、確かに断ることも出来たんだ。

転生したくない、もう死んでもよかったんだって言えば俺はここに来る必要はなかったんだ。

そうしなかったのは、まさしく俺の意思。

俺が自分の意思で転生することを望んでいたから、あの転生するときに俺は他の力を求めたんだ。

もらった力は修業しなければ使えないものだった。だけど、俺は確かに転生することを、見ず知らずのうちに望んでいたんだ。

だから俺は、ここにいます。

それを神のせいにしちまうのは責任の転嫁だ。

言われて初めて気付いた。

俺は主人公ヒーローになれなくたっていいんだ。

俺はただ、ここにいますだけでいい。

「……ありがとう」

「分かればいいんだ、分かれば」

女性は満足げに微笑んで頷くと、俺から手を話して一歩だけ離れた。

よし、もう悩む必要なんてない。ここにいるのは俺が望んだことだ。だったら、やれるとこまでやってやる。

……と。頭が冷えて改めてやることにしたのはいいが、この女性はいったい誰なんだ？

しかもなんか俺の転生したことについても知ってそうだし、どうなってるんだ。

「で、アンタは誰なんだ？ その……俺の事情について知ってるみたいだけど」

「なんだ、オレのことが分からないのか？ 薄情な奴だな。こっちに来てからずっと一緒にいたのにな」

「ずっと一緒にいた……？ それってどういう意味だ？」

「まだ分からないか。オレはレーヴァテインだ」

「は？ ええ」

「ッ！？」



俺の間拔けな叫びが、魔獣の森に木霊するのだった。

「……マジか？」

「本当だ。嘘についてどうするっていうんだ」

「いや、だってさ……」

「信じられないのも仕方がないがな」

俺は目の前にいる女性から、信じ難い話を聞いた。

女性はどうかやら本当に神から貰った大剣、レーヴァテインということらしい。

神に人間になれる機能をつけてもらったとか言つてて、俺の面倒を見るように言われたらしい。

最初のうちに俺が気絶して崖から落ちたとき、助けてくれてたのはどうやらこいつだったらしい。

この一週間に顔を出さなかった理由はどこまで一人で修業して、どこまで心を折らずにいられるかを見たかったためらしい。

しかもこいつの予想よりも大分早く心が折れちまったから、がっかりしたなんて言われた。

……一週間保つただけでも良しとしてくれよ。

「甘えるな。オレが修業をつけてやるからには、そんな甘い考えはさせないからな」

「修業……？ アンタがつけてくれるのか？」

「当たり前だ。何のためにオレが来たと思ってるんだ？ 今日からみっちりオレの使い方、教えてやるからな」

そう言いながら俺を見下してくる女性。

こ、怖い……。眼光が果てしなく怖い。

人間じゃないけど、同じ人型でこんな眼光出来るもんなんだな。

「俺は龍崎桜牙……ってそれは知ってるか。で、俺はアンタのことはなんて呼べばいいんだ？」

「ヴァンだ。ヴァン・レーティ」

「ヴァン・レーティ……」

それってレーヴァティンの文字列を変えただけだよな？

なんて安直な名前なんだ……。別に文句があるわけじゃないからどうでもいいけど。

俺がそんなことを考えていると、何故かヴァンに思いっきり頭を殴られた。

「な、何すんだー！」

「変なことを考えたな？ いいか、修業中に他のことを考えてみる。オレは容赦なくお前を殴り飛ばすからな」

覚悟しておけ、とヴァンは付け足したあと再び睨み付けてくる。

や、やっぱりこいつ、めっちゃめっちゃ怖い……。

俺は師事する人が出来たはいいものの、強くなるまで何回殴り飛ばされないといけないのかを考えながら、憂鬱になるのだった。

## Ep4『炎、師事する』（後書き）

次回から本格的な修業に入ります。

Ep10まで終わらせられたら幸いです……。

報告になりますが、旧式とはかなり違う話になると思います。

オリジナルの話を結構盛り込んで、大戦期は介入しないで傍観の恐れがあります。

あとはミレアとセルキは出ない可能性大で、他のオリジナルを出したいと思ってます。

例えば主人公を慕う氷爆野郎とか、熱血漢の雷速野郎とか、唯我独尊の紫雲野郎とか、内気の疾風弓姫とか……です。

今のところ予定するのはこのくらいですが、とりあえず『氷』『雷』『雲』『風』のオリジナルと『炎』の主人公で話を進めます。

他に属性で出してほしいのがありましたらオリジナルのアイデアを（殴

え、えー……。とりあえずEp10までは主人公とヴァンで進めるつもりです……。

では、感想待ってます！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7176n/>

---

真祖の吸血鬼と業炎の剣帝～転生したネギま！での俺の戦記～

2011年10月10日13時57分発行